

第10回大会 基調講演

2008年11月9日 奈良教育大学

## 国語教育と日本語教育をめぐって

水谷 修

久しぶりに奈良へ来ました。でも今回学んだことは、奈良の一条、二条、三条という道の名前は平行して存在するんじゃないということですね。京都のような平行線ではないということを感じました（会場笑）。

### 国語教育のもつレディネス

国語教育と日本語教育ということを出発点にしてお話をさせていただきますが、言語政策の課題というのは、実はいろんな領域に存在していて、少なくとも言語使用に関する政策の問題、政策ないしは計画、それから言語教育に関する政策・計画の問題とは同じではないんです。そこで、今日のお話は言語教育に関することに限ります。まあ本当に簡単にはいかないんですが、国語教育と日本語教育が、何が違うかということをよく聞かれます。でも、本心を言いますと実は基本的なものは違いがないと僕自身は考えています。その考え方の基にあるのは、外国語教育も国語の教育も根本的なものは同じはずだ、という考えに通じるものです。今日、もし少しでもそのことについて触れられれば、ありがたいと思っただけです。

でも非常に表面的なところから入って、国語教育と日本語教育、外国人のためのというか、第二言語としての日本語の教育という方が正確かもしれませんが、どう違うかと言いますと、国語教育を支えている特徴は3つばかりある。もう少し立てたほうがいいかもしれませんが、少なくとも、たとえば国語教育では学習を開始する時点での学習者の背景、レディネスが日本語教育とは異なる。要するに、就学以前にすでに日本語の能力が身についている。身につけているといっても、何でも出来るということじゃありませんけれど、きわめて基本的なものは実は身につけてしまっているということなんで、これは外国人のための日本語教育とは大いに違います。具体的な例が、外国人に日本語を教える時には、皆さんご存知のように、「は」と「が」の使い方がどう違うかというところとかが、第一歩の解決しなきゃならない課題として教師には求められるわけです。

一方、日本の学校教育の中で小学校の1年生に入ってくる子供は、「は」と「が」というのは、もうおおよそできあがっているわけですね。中には最近「は」と「が」の区別ができ

ない子供がいると聞きましたけれど、真実はどうなんでしょうね。でも、そういう6年間の大きな言葉に接する時間の差、経験の差が、これが一番大きなものです。外国語としての日本語教育の場合には、例えば「はい」という言葉があって、「そうです」という言葉があると、この差はきちんとおさえて教えなければなりません。日本人の子供の場合は、実際には使い分けができていくわけですね。「はい」というのと「そうだ」「そうなんです」「そうなんだよ」というような表現の差というのは、意識化して説明せよといわれるとできないけれども、ちゃんと使い分けができる。外国人にとっては、いくら努力しても持っている力では使い分けができないわけです。中国なりアメリカなりで日本語を1年、2年、3年と勉強して日本へ来た学生に意地悪をしますと、「はい」と「そうです」はどう違うか教わった学生が実は極めて少ない。

教え手の方にも責任があるんですが、さっきは日本人の子供は「はい」と「そうです」「そうだ」というのを、使い分けると言いましたけど、面白いことに日本人が今度先生になって教え始めると、「はい」と「そうです」をごっちゃにして教えてしまう。自分が実際にやっていることと意識化して教えることに大きな差があるわけですね。これはたまたま中国の日本語の先生が留学生として来日していた時に、ゼミのクラスで調査をやらせて、テープレコーダーを持ってあちこち行かせた。で、眼科のお医者さんへ行った学生が録音取って帰ってきて、プレイバックしながら聞いてみると「はい」と「そうです」を適当に使う。お医者さんが「このめがね変えた方がいいと思う」とおっしゃると、その学生が「そうです」と言う。(会場笑)「それは失礼だよ」と言ってもなかなかわからない。それは実は教え手の方に問題があって、教える方は、自分は使い分けしているのに教科書の中に使い分けた例はほとんど出てこないんです。いや表面的に発見できない形ですら出てこない。「これも本ですか」「はい、そうです」という形で出てくると、「はい」と「そうです」は同じですか、違いますかというような質問は多分しないで、「はい」も「そうです」も同じだと受け止めていく学習者が多いわけです。だから日本人の子供は使い分けしていると言いましたが、ある段階までいって特に教えるという立場になって日本語を説明するとなると、ちゃんと使い分けた自分の力を与える習慣が意外に少ない。どこかで「はい」も「そうです」もどっちもイエスだというような教え方をしかねない。こういう問題が、年をとってから意識化できるかということは別にしてですね。

少なくとも小学校の国語科の授業を受け始める前に、かなりの文法的な能力、音声に関する能力はある。語彙の方はやっぱり社会性の進捗度とともに変わっていきますから、最初はない。でも5年生6年生と進む段階で社会性が高まってくると、敬語の使い分けが始まるわけですね。そういった多少の進捗の差はあるけれども、基本的には、国語教育では始める前に日本語の基本的な能力が入っています。で、識字能力だとか文字を使う能力というのは子供の間はあんまりないから、これはがっちり教えていく、いや教える対象にできる可能性があるわけですね。だから漢字を教えていれば教えた気分になってしまう可能性が結構ある

わけです。今でも漢字検定協会の受験者は毎年増え続けていて、200万をもう突破しています。増え方が多少減ったとこのあいだ理事長が言っていましたけど、目に見える、自分達が持っていないものに対する心配はするんですが、自分が持っているもので意識化していないものは問題だとはあまり考えない、ということが起こってきます。

## 国語教育のもつ制約

2つ目の枠として、もうひとつ大きな国語教育の制約といいますか、置かれた位置としては、学校教育の中で他の教科が存在して、その中のひとつの教科として国語教育がある。これが実は、後ほど申し上げますが、何とかこの問題にメスを入れて、言語能力・言葉の力を伸ばしていくためには、国語教育の国語科の枠の中だけで、国語の能力の問題・言語の能力の問題を考えては根本的な解決は得られないと思っております。

それから、もうひとつの枠に伝統的な批判性、批判意識の存在があるかと思えます。これは明治以前からもあったわけですが、学校教育が始まって以来ずっと作り上げられてきた大きな規範性・標準性といいたしめようか、それが実は大きな荷物になっている。いい面もあるんですが、その規範性から逃れることが非常に難しい。漢字をどれだけ覚えさせるかというようなことについても、今度常用漢字が変わりますから、今どうしているかな、前に29字増やしただけの時にも結構大騒ぎをしましてね。だから今、現場はどうしているかなと思うんですが、あきらかに常用漢字は中学までには教えなきゃならない。するとその数をこなすためには一カ月に何字を教えなきゃならないというようなことが起こってくるわけですね。こういったしなきゃならない、こういうものを与えなきゃいけないという規範性に関しての束縛はかなり大きいと思います。フランスなどの場合、16世紀ぐらいだったでしょうか、言葉を何のために使うかということに関して、論理性を徹底的に追及するというような歴史があったわけですね。日本の場合は目的性などは残念ながらあまり考えなかった。たくさんのがりがある方言を撲滅させて、標準的な、もっと極端な言い方すれば、軍隊の中で命令がちゃんと聞けるような、そういう言語能力を作る必要があるというような目的はあったけれども。言語を何のために使うのかということについての議論はほとんどされてなかった。今、言語政策学会が一番しなきゃいけないのはそこだろうと僕は思っています。

批判がないわけじゃないです。方向性や目標は必ずあります。今の指導指針の中でも、変わったかな、「平明・的確・美しく・豊かな言葉」という4本柱が立っています。まだあるはずですね。「平明」というのはわかりやすい。これはマスメディアなど放送なんかの場合も聞き手があるいはテロップの読み手がちゃんと読めなければだめだという形で、ある程度コンセンサスがあるでしょう。もっとも、ある時期はわかりにくい言葉の方が価値があるというような雰囲気があったこともあるんですけど、もうそれは変わってきているのではないのでしょうか。伝わりやすい、「平明」。それから「的確」ということ。これは追求の仕方がやっ

ぱり足りないのではないかと思いますね。「美しく・豊かな」と、この辺になると本当に困るんですが、問題はこのあたりに関連するところで、言葉の教育者の中で議論が起こってくるわけですね。今の国語教育は何かというと、『走れメロス』とか『ごん狐』ばかり教える(会場笑)。「美しく」だけ追求するけれども、というような議論が出て、いやそうではないんだ、その心にかかわるところが日本語によるコミュニケーションではきわめて重要である、というような反論から始まって、ああだこうだとやっているわけです。が、それを解決するためには、その中に入って議論するのではなくて、外回りから、なぜ我々は言葉を使うのか、言葉を使うことで何をしようとするか、何をしようとするか、という言語社会学的な、と言っていいんでしょうか、それぐらい広げた中での言語政策・言語計画を考えていく、その役割をする仕事があつたぶんこの学会の一番大きな使命だと僕は思っています。

### 日本語教育の目的性

そういった特徴的なことを国語教育が備えているのに対して、日本語教育の方は学習を開始するときは白紙であるのが普通です。ですから、それこそ発音についても最初からしなければならない。6年間、母親や父親、周りの人の発音を聞いて、同化していくという訓練の場を経過してきていない外国人の場合は、発音から始めなければならない、ということがあつたわけですね。で、スタートが違う。もうひとつは、目的性に差がある。限られた時間の中で、日本語を使って生きていかなければならない。日本語を使って商売をしなければならぬ。日本語を使って研究をしなきゃならない。日本語を使って日本人とコミュニケーションをとらなきゃならない、というような目的がある。それは理科的な領域であつて、技術的な領域であつて、あるいは人文、ジャーナリスティックな領域であつて、いろんな生きていくための仕事の中で、日本語を身につける必要がある。以前は結構いたんですが、趣味で日本語をやる。好きだからやる。で、役に立とうが立つまいが、かまわんという人いたんです。最近はいなくなりました(会場笑)。考えてみると、16世紀ですか、宣教師が日本語を学んだ時は、明らかに目的意識はあつたわけですね。これはキリスト教を布教するために、日本人に説教するために日本語を身につける。だからその目的性の大きさという点が、国語教育の場合よりも大きい。じゃあ、国語教育に目的性が、無いかというと実はそうではないはずなんです。現実はその問題が解決されてきていない、と思うんですよ。だから何に向かって、どういう能力を与えるか、ということが、学校教育で明確に示されていないと僕は思っています。いや、ある程度はある、でもこれでは足りない。で、大学に入ってきた学生が、今持っている日本語の理解能力や表現能力ではとても4年間にこの目標までは到達しないだろうと思わされるのがよくあります。その問題の大きな青写真を作る仕事があつた言語政策学会にあるはずだと思うんですね。

それからもう一つ、これは少し後で申し上げますが、日本語教育は目的、何をするかとい

うのに深くかかわる。そのために標準性を考えていく時にゼロから出発しますから、いろんな意味での積み上げをしなければいけない。そうしないと正確に入ってこないわけですね。たとえば1年やってこれだけ出来るようにしよう。あるいは3年やってここまで到達する訓練、教育をすべきだということを考えるわけですね。その辺が目的と結びついていることが、最初の段階では特に必要です。これが一番基礎だ、基本文型はこうだ、基礎語彙はこういうものだ、というのを一生懸命作って、それで能力試験などもシラバスを用意して、ここまでできていれば大学で勉強できますよ、とかというようなことをやるわけですね。

### 外国人の子どもたちの言語問題

そういうもっともっと、本当は違った見方で国語教育と日本語教育の差を考えていく必要があると思うんですが、さっきちょっと言ったような、例えば学習を開始する時にゼロであるか、すでに6年間の基盤が出来ているかというようなことが、大問題になり始めている。しかもこの問題の解決は、これから10年以内には絶対にしなければならなくなるだろうと思っていることがあります。関西地域はどれぐらい増えていますか。あの群馬県や神奈川県・静岡県・愛知県では、すごい勢いで外国人の定住者、働いて生活している外国人が増えてきています。その子供が日本の小学校へ通って勉強を始める。で、受け入れた小学校では何とか先生を用意してがんばっているんですが、その中で一番問題になっていること、私自身が心配していることは、取り出して教育をするというやり方をしていることですね。1人か2人、教室の何十人かの生徒の中に全然わからないでぼかんとしている生徒がいるのは、なんともなりません。だから障害者教育の場合でも同じような方法をとることが多いんですが、問題のある、そういう人を別のクラスを用意して日本語を勉強させる。それ自体はいいことだと思うんですが、問題を引き起こしている。というのは、日本語の勉強だけでも問題がある。いろいろあります。教え方が悪いとか、動機がないとか。言葉だけやってますから無理があります。その子供に理科の教室へ参加させる、あるいは算数のクラスに参加させると、内容がわからない。日本語を勉強しているといってもそれは算数や理科や社会の勉強と結びついていないんですね。だからそのために脱落していってしまうブラジル人の子供たちがどんどん増えていっている。これは一刻も早く手を打たないと崩壊する可能性があると思っています。

日本に定住している外国人の数は、昨年度ですか、210万人です。この210万という数は、しばらく前に数の伸び方を見てたんですが、10年で倍になるという感じになってきました。10年で倍になるというのは、今210万だとこれから10年先は400万になる。400万が日本に平均的にばらまかれるということはありません。さっき言いました4つの県とか、特定のところに集まってきますね。そうすると、愛知はブラジル人、最近ブラジルよりも、都市・都会なんかでは中国人子弟が増えてきましたね。だからこれが増えてくると、ある特定の地域では、まもなく2割を越すとか、半分になるということが起こってくる。で、そう

いうところの公教育では、いったい日本語をどうするんだ、ということが始まると思うんです。次の指導要領の改定は10年先ですか。ぜひその10年先の改定の前に、学会からそういう基本的な教育の枠組みの中で言語に対応する施策はこうあるべきだという提案をしていただけたら、日本のためだけではなくて、来ている外国の人たちのためにも役に立つはずですよ。そういう研究を是非していただきたいなあと思っております。外国人定住者の子供たちの問題だけではなくて、もっといろんな問題があるわけですけども、少し話を先へ進めていきます。

### 各領域とことばの教育

さきほどちょっと触れたんですが、身につけさせなければならない日本語の能力は、実は言語そのものの中にだけあるわけではないということですね。国語の能力というのは、国語科の教育の中でと考えやすいんですが、僕自身は、それは違うと前から思っています。というのは、むしろ理科の教育でも算数の教育でも社会の教育でも、その中で日本語の能力は伸びていく。で、日本語の能力がなければ理科の勉強はできない。そこが教科が分かれてしまっているために、国語の先生が遠慮しすぎているんじゃないか。たくさんの科目を作ったりしないで、昔のようにですね、読み書きそろばんか、あの僕自身の子供の時そうだったと思うんですよ。1年生、2年生もなかったんじゃないかなあ。理科とか社会とか、今またそっちに戻ってきたんですか。

会場：「生活科というのがあります」

そうですね。

少なくとも、花の形がどうのというのを私は国語の時間に勉強しました。今韓国はそうでしょう。徹底的な3領域を立てて、その中身は植物の観察というようなものが国語の教科書に入っているわけですね。観察や、あるいは、実験に使う言葉が言葉であるということ。専門の言葉は専門の領域でやるというのは、僕は間違っていると思う。一定の段階から先は専門領域でやるべきです。でも基礎的な段階では言葉がしっかりかかわらないと、だめなんです。時々算数や数学の世界の人から一緒に研究しませんか、という話が出たりします。いつも消えていってしまいがちですが、算数・数学に使われる言葉にやっぱり困っている。「1に2を足す」「1足す2」は何が違うの、それ必要なの（会場笑）、というようなことがあるんですよ。だから数学の世界、算数の世界の言葉をもっと整理した形で、抽象的な概念の中身をきちんとつかめるような言葉の使い方を考えさせるといえるのはあるはずですよ。その問題を解決しないと科目の枠づくりは限りなく広がっていってしまう。法律もそうですね。最近は法律の文が難しすぎるということを時々聞くようになりました。でもすごく難しいんですよ。明治以来、変わっていない文が六法の中にはちゃんと今も生き続けています。その専門の立場の人にはそれなりの意見がある。でも言葉を効率的に使うという立場と、効率的

に覚えるという立場からの意見の具申はあった方が専門の人たちは助かるはずですが。僕の考えでは、国語の時間の中よりは、算数や理科・社会、体操や音楽の時間の中で教師が使う言葉、学生・生徒に与える言葉の中に学習の出発点の糸口がある。日本語自体が形成されている。ですから国語教育を本当に効果的にしようとしたら、小中学校の、あるいは、高校の国語の先生は他の教科の先生方にどう教えているのか、言葉の指導をどうしているのか、ということ強く主張すべきだと思います。そうでないと、国語で教えなければならない中身がどんどん増えて、漢字がいい例ですが、量だけ増えていってしまいますから。目的を遂行するための言語を制限していくということが難しくなってしまいます。だから国語科の授業をやっているだけではなくて、他の教科の先生に指導をしていただきたい、助言でもいい。各教科の中で言葉の訓練をしてもらう。それが拒絶反応にあって出来ないのであれば、国語科の教育の中に理科的な社会的な他の教科を含める。体操を含めてもいいと思うんですよ。号令のかけ方だって大事ですから、それを国語科の教科の中に入れた新しい指導要領案を、今度は出した方がいいのではないかと。またもや今日はわりに勝手なこと言っていますけれど、お役人の前ではあんまりは言わないんですが(会場笑)、でもたぶん間違っていないと思うんです。言葉の果たす役割というのは一定の時間を区切ってやれることと、時間や枠などの中ではできないことがある、ということは正しいだろうと思っています。

## 無意識な使い方

僕は国語の時間の中ではなくて、他のクラスで教わったことがありますね。「以上」と「未満」という言葉の使い方ですが、「以上」というのは「もってあがる」から、18歳以上というのは18歳も含むんだ。「未満」というのは、そこに達してないから、17から下だ。この「以上」とか「未満」とかという言葉は、客観的な言葉だと思っていたんです。それが3年前のNHKの放送用語委員会で、4年前でしたか、土地の地上権の法律が変わりました。東京の地下鉄のトンネル掘っていくのに、地上権が邪魔になったんです。地上権というのは、地球の真ん中まであるんですよ。だから下を通れないから交渉が大変だった。そこで法律を変えて、今は50メートルまでしか権利がないということになっているんですよ。その下を走らせれば、いくらトンネルを掘っても問題ないんですね。その法律が出たときにそれを伝えるニュースの原稿を書くのに、どっちが正しいですかという質問がきたんですよ。それは「地上権は、地表から50メートル以上には及ばない」というのが正しいか、「地上権は地表から50メートル以下には及ばない」(会場笑)という文を使うのが正しいか。(会場笑)困っちゃいますね。(会場笑)皆さんはどう考えますか。「地上権は、地表から50メートル以上には及ばない」「以下には及ばない」、どうぞ。

会場：深く、とか、深さ・浅さで表現してはどうですか。上・下ではなくて、50メートルより深い。

別の言い方をしろということですか？

会場：「以上・以下」だったら、その数の抽象的な意味での「以上・以下」なのか、それともほんとに深さで「上、下」を言っているのかわからないので、50メートルより具体的に深いことを意味するのか浅いことを意味するのかと言うのを（会場笑）

いや確かにそうですね。別の言い方をすれば安全ですよ。でも、以上とか以下というのは基本的な言葉でしょう。使っていいはずだけど、どちらも成り立つということは、それまで全然気がつかなかった。それで苦し紛れに考えた答えは、要するに視点の違いがある。地上権というものは、ここからずっと下がって行って、50メートル以上には及ばないという権利の方を軸にした時には、「以上」も使えるんだ。それを図面化して、映像がテレビの映像で、もし出ていればたぶん50メートル、（図示しながら）これが10・20・30・50メートルで「以下」。このときだったら、図式的にして見て考える時だったら、客観的描写であれば「以下」と使えるんじゃないかと答えたんですが、いまだに自信がありません。でも少なくともその時感じたのは、こういうものすごく客観的だと思われる言葉が、実はけっこう幅がある、使い方に幅があるというのを思い知らされました。そういうのは結構たくさんあるんです。

日本語教育の世界では、「ぐらい」と「ほど」「ばかり」というような言葉は、程度を表す言葉なんですね。ところが、学生が町の中で聞いてきて質問する。

「先生、昨日、店に行ったら、日本人のお客さんが、ビールを3本ぐらいくれって言ってたけど、あの『ぐらい』は何ですか」（会場笑）

前に100グラムか、95グラム、98グラムとか、そのぐら이었다ら、「ぐらい」が使えるんだってことを教えていたもんですから、やっつけられたんですよ。だけど、こういうときの3つぐらいとか、3本ぐらいたって、いうじゃないですか。個人差もありますよ、地域差もあります。地域差みたいなものを我々は意識する機会を与えられていないんです。さっき国語で批判性と言いましたが、正しいもの、もっとも美しいものを覚えましょう、でやってきているから、自分の持っている言葉の使い方を分析し、意識化する力がないわけですね。そのために日本語も教えるににくくなっている。だから、その「ぐらい」だって、「ビール2本ぐらいらおうか」と言う時、店の人が、「はい」と。決して「2本ぐらいですね」とは言わないで「2本でございますね」、とこういうでしょう。だからここで「ぐらい」というのは、実は程度を表すんじゃないんですね。相手に押し付けないという、一種の敬語です。待遇表現なんですよ。だからそういう働きというのがいっぱいあって、それを我々は上手に使い分けてきている。それを意識化する訓練をどこかでしないと、論理の話もできるようなにはならないかもしれない。それじゃ外国語教育でやれるかということ、刺激は受けるんですが、自分の自信となかなかつながってこない。



## 発音と文法の意識化

今日の話は、国語教育と日本語教育ですが、英語教育にちょっと入りたいと思います。英語教育の世界で、前にある大学のある研究会に行った時に、英語の先生方に聞いてびっくりしたことがある。たまたま“l”と“r”の発音の問題をやっていたんですが、日本語の「ラ行」の子音はどういう発音かご存知か聞いてみました。十何人いる人の中で、ほとんどいなかったですね。音声に関心のある人たちですよ。英語の音声については詳しいけど、日本語の音声についてはまるっきり関心がない。だから自分自身もそうでしたが、“th”の発音がどうか、“l”がどうだとかやっていて、やってみて、先生がそれでいいとは言う。その時は、「お、よかった。」2日経つと、また全く忘れちゃうじゃない。自分の持っているものについての鋭くて正確な判定力がなければ、自信は生まれえないはずですよ。たぶんこの中で、今、ばあっと「ら」の発音をお願いすると、3分の1は“l”です。日本語に“l”はないという幻想があって、時間があつたらやるんですけど、僕自身は名古屋方言ですから「ラ行」音が違うんですよ。(発音してみせて)これが僕の「ラ」です。「リ」と言うときは弾き音です。日本語の音声について書いてある本を読むと、弾き音と書いてあるけれど、僕の「ラ」は [r] ではないんです。[l] なんです。それから「ロ」も [l] です。教え始めた時に、アメリカ人の学生が先生の“l”の発音はすごくいいって言って、すごく喜んだんです(会場笑)。なんのことはない、自分の音があつたからで、でそのときにほめられたのは、たまたま「ラ」か「ロ」の方だったと思うんで、「リ」「ル」の方ではなかった。だからその実際に自分が自信を持てるのは、自分がもっているものを意識化してとらえられること、ここの教育がすごく大事ではないか。

僕は高校の時、文法の教育が大嫌いでした。国語の文法の授業は、先生が嫌いだったんだな(会場笑)。両方かな。四角い枠の中で「未然・連用・終止・連体」と、そこへ活用形を書け、本当に不愉快でしたね(会場笑)。日本人の場合、文法教育でどうしてもしなきゃいけないのは、暗記することではない。むしろこれから起こるだろうという時には、あるいは言い切る時には、「読む」という言葉はどういう形に変化するか。「読む」とか「読まない」とか「読もう」とか、その規則性、法則性を発見する。そういう知恵を作り上げていくことが、文法教育の本来の目的であろうと僕は思っています。あの一覧表を白くしておいて埋めろというのは、暗記することだけですね。問題を解決していく力を養おうという発想ではないと思う。いつまでたつたつて、新しい事態に立ち向かっていく力を養う言語能力を与えることにはならないはずだ。

あと、5分ぐらいですか(会場笑)。

司会者：あと5分をお願いします(会場笑)。

## 課題解決型の教育

ちょっと脱線しすぎてしまって、よそへ行っちゃいましたけど、繰り返しになりますが、一人ひとりの子供、あるいは青年の日本語能力を開発するってということについて、日本語教育の世界で今すごく心配していることがあるんです。ある意味では、国語教育の世界はやっぱり非常に良識化・形式化という形をとるべきです。情緒性の問題だけは別ですけど。ところが、外国人に日本語を教えている先生が形式化を始めているんです。教科書を使って教えることにキュウキュウとしていて、言葉についての研究をする、自分で調べてみようという姿勢が減ってきています。だから教科書や教材を見ていると、教えやすい教材ばかり増えてきています。どんなに教えるににくくても、学習者に役に立つ、そのために教え方を工夫する、挑戦するってというのが、未開拓の世界での一番楽しみだと思うんですが、やっぱり日本全体がマニュアル化してきていて、あんまり苦勞はしたくない。どうも日本語教育の世界だけではなくて、もしかすると国語教育もそうかもしれませんね。人に責められないで、安全にやれる指導要領そのものに、やり方を書いた参考書を使って、やればいっていうふうになってきちゃったのかもしれない。このままいくと自分で考える、あるいは人に工夫して教えるという人がなくなっちゃって、ことによったら新しい発明も生まれなくなってくるかもしれない。今の流れは中国の主席が「戦略的互恵関係」といいましたけど、その意味がわかった政治家がどれぐらいいるかなんて、あの、言葉の問題は、ある人間の行動を示唆します。考え方を裏書します。だから、技術力を伸ばしていくため、あるいは商売をして稼いでいくためには、その裏に存在している考え方がどうであるかをどれくらい意識的に考えられるかが大事だと僕は思っているんです。でもだんだんみんなそんな面倒なことはやりたくない、となると、もしかすると30年先には日本は世界の四流国になるかな、(会場笑)と心配しています。でもまあ、みんな少しは考えてくれると思っているんですが、若い人たちにもいい子がいっぱいいます。だから努力して、言葉の問題もつぎはぎで研究をやるのではなくて、独創的に自分で問題を解決する。今後の研究のあり方としては、18期の学術会議が打ち出した指針があります。「ジャパン・パースペクティブ」、「日本の計画」というんですが。その中で、今後の日本の研究は自然科学も全部含めて行き詰まり現象を示している。これを突破するためには、研究の仕方を変えなければならない。そのためには従来行ってきた観察型・発見型「あ、こういうことがわかった」「こういうことがあります」というやり方だけではなくて、課題解決型、問題をどう解決していくかが求められる。工学部の研究っていうのはわりに課題解決型が多いですよ。そのためにダイヤモンドついたり、ダイナマイトついたりして、迷惑かかることがあるんですが、でも課題を解決するための研究、という柱を一本立てる必要がある。で、課題解決型の研究を進めるためには、俯瞰型の研究が必要である。俯瞰っていうのは「バード・ビュー」の俯瞰ですね、鳥の目で見る、要するに総合的に同じ次元で並べ立ててはだめなんです。広く見るための俯瞰型の研究をする必要

がある。このことは言語だけにかかわらず教育に関する計画では、必須の行き方だろうと僕は思っています。どうやって課題を解決するか、課題をはっきりさせるか、いかなる方法で、実験的手法か記録を徹底的にやるか、いろんなことがありますけど、課題を解決するための研究が必要です。それから総合的な研究が国語教育の問題を解決するために、国語科の先生だけでなく、音楽や体操や理科の先生たちも巻き込んでその問題を解決するための研究を進めるべきだと思っています。俯瞰型の研究の体制が必要になってきたと思います。お約束した時間になりました。

(名古屋外国語大学)